

美術専攻 日本画研究領域

ソン エイ

孫 叡



Hell of a Night

岩絵具、墨、木炭、雲肌麻紙、パネル

Hell of a Night

本研究は、日本画の形式を通して、「生命」・「自我」の関係性を造形表現において探求することを目的としている。

従来の私の制作は、動物を媒介として自然やロマン性を象徴的に描くことに焦点を当てていた。しかし近年の制作を通じて、私にとって動物はもはや「外界の対象」ではなく、「自己の内にある生命的衝動の象徴」として現れるようになった。こうした変化は、創作の主体が外界の観察者から、内面の体験者へと移行したことを意味している。

私にとって「生命」とは、単なる生物学的な存在ではなく、創作行為を駆動する根源的なエネルギーである。そこから「自我」という意識が芽生え、形を持つようとする欲求が生まれてくる。そして、その欲求が外へと流れ出ることで表現が成立する。表現された線や色は、再び生命の感覚を喚起し、創作者自身の意識に新たな刺激を与える。このように、「生命」から「自我」が生み出される関係は一方向的な発露ではなく、相互に作用しあう循環構造として表現の中に存在する。

私の制作過程においては、明確な構想や理性的な目的意識よりも、感覚や本能による衝動が出発点となる。描く行為そのものが「生きること」の延長線上にあり、筆致や色彩の選択は、理論的な判断よりも内面的なリズムや感情の流れに従って決定される。そのため、完成された作品は単なる造形の結果ではなく、私自身の「生命」の動きを可視化した痕跡として位置づけられる。

また、こうした制作態度は、自己と世界との関係を再構築する試みでもある。「生命」の衝動を外化することによって、「自我」は一度対象化されるが、同時にその表現を通して再び「生命」の感覚に触れる。つまり、創作とは「自己を離れ、再び自己へ還る」過程であり、そこに「生命」の循環が生じる。

この循環こそが、私にとって持続的に新たな表現的可能性をもたらす要素であると考えている。